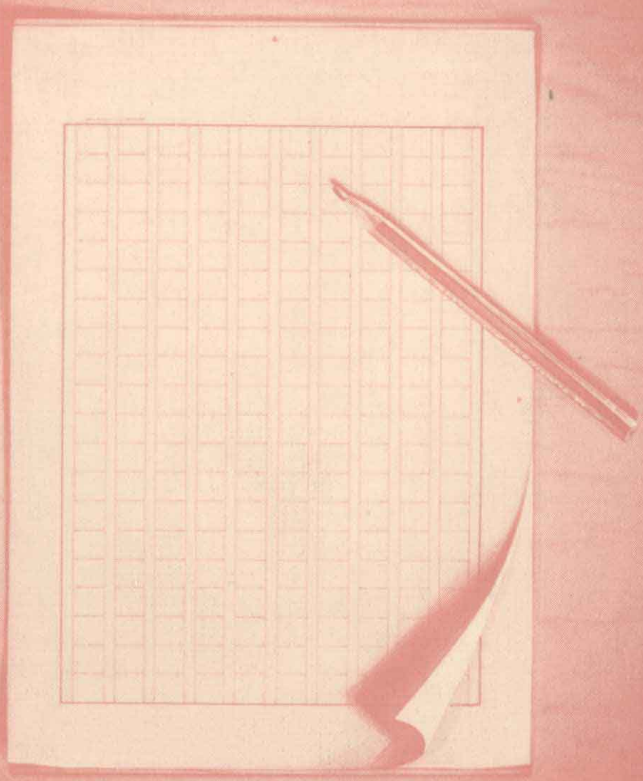
戦争を知らない世代へII⑤宮崎編

大地に爪する想い

戦中戦後の開拓の記録

創価学会青年部反戦出版委員会



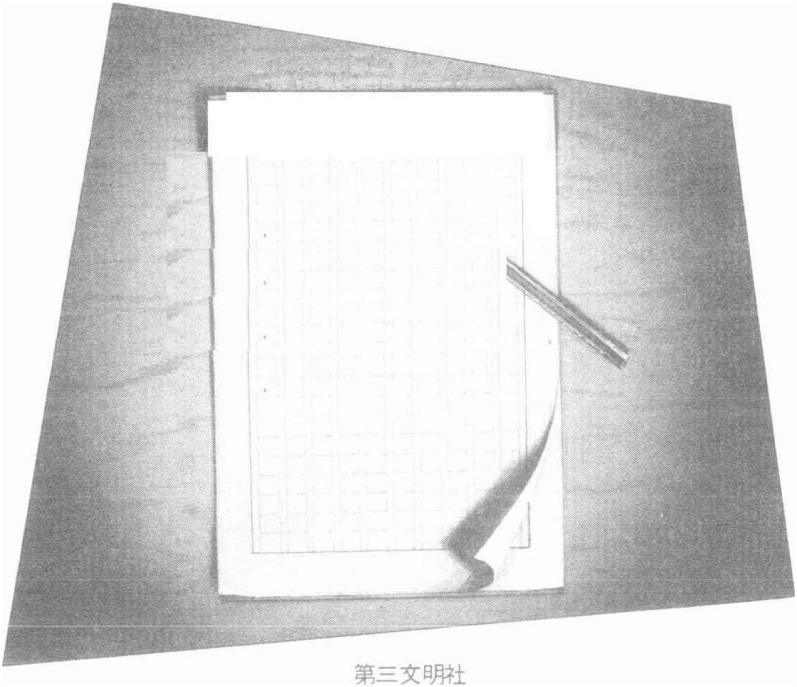
第三文明社

戦争を知らない世代へII⑤宮崎編

大地に爪する想い

戦中戦後の開拓の記録

創価学会青年部反戦出版委員会



第三文明社

戦争を知らない世代へⅡ⑤宮崎編
大地に爪する想い——戦中戦後の開拓の記録

昭和57年8月15日　　初版第1刷発行

編者© 創価学会青年部反戦出版委員会
発行者 栗生一郎
発行所 株式会社 第三文明社
郵便番号 101 東京都千代田区猿楽町2-5-4
振替 東京5-117823 電話03(294)8731(代)
印刷所 凸版印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取り換え致します
1982 Printed in Japan
ISBN4-476-07205-4 C0036

まえがき

「戦争の悲惨さは、口にも出したくない。思い出したくもない！」「二度とあんな苦しい思いをさせてはならない。愚かなことだ」「当時は、まだ子供でした。食べるものは、牛や馬に食べさせるようなもの。私も、栄養失調の一人でした」――。

戦後三十七年、戦争体験者の脳裏には、今なお、その悲惨な光景が焼きつけられ、青春時代の痛い、苦しい思い出となって沈澱していることを、この一編一編の証言が如実に物語っているようでならない。私たち「戦争を知らない世代」は、この先輩たちの心の痛みの訴えを決して忘れない。むしろその苦しみを共有していきたいと願っているのだ。

「戦争」――いったい誰が、それを欲しているのか。人間は、皆平和を求め、幸福を願っている。にもかかわらず、私たちの周囲には、戦争への足音がこだまし、「平和を守る」という美名のもとに人間を殺りくする兵器を増強するのに狂奔する動きがあるのはどうしたことだろうか。

すでに戦後世代が、人類の半数を数えるところまでやってきた。「戦争を知らない世代」の動向によって社会の動く度合も、ますます深まってきている。それだけに、戦後三十七年間の歳月

の隔りを私たちは、大きく乗り越え、反戦・平和の叫びと運動を地道に粘り強く進めていかなければならない。

今回の企画「大地に爪する想い」＝戦中戦後の開拓の記録＝も、農業県・宮崎を中心に作業を進めた。当初、比較的平和で、豊かな〝食糧生産県・宮崎〟といったイメージを打ち払うことはできなかった。しかし、三十一編の証言を寄せてもらうために開拓者を訪ね、一編一編証言を集めていくにつれ、戦争の犠牲とツメ跡は、こんな地域、こんな人たちにまで刻印されていたのかと実感せざるをえなかった。

その三十一編の原稿には、いずれも食を求めて開拓地に入った人たちの想像を絶する生の声が収録されている。開拓地の大半は、耕せども耕せども、土地がやせていて不作の連続。そのため、極度の飢えから、ついに栄養失調にかかった弟を餓死させてしまった人。無理な重労働で病気となり入院。その治療代の支払いがつい最近までかかった人。援助金を蓄え、やっとの思いで購入した牛が変死した人など——直接戦争につながらなかったものの、戦争の影響による悲哀の一面が縷縷述べられている。

願わくは、この一書が反戦思想高揚の一助になれば望外の喜びとするところである。また、この出版を通し、心の中に秘めていた貴重な戦争体験を語ってくれた人たちへ応える上から、私たちは、この作業を第一歩としながら、生涯、反戦の活動を地道に展開したいと誓うものである。

最後に、多忙ななかに本書の作成のため取材および編さんに真剣に当たってきた宮崎県反戦出

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

版委員会のメンバーの労に心から感謝の意を表したい。

昭和五十七年八月十五日

創価学会青年部
宮崎県総合青年部長　山口　浩

目次

まえがき
年表・グラフ・地図
働き手を取られた悲しみ……山田マスヲ　13
一家九人の〝食〟に悪戦苦闘……川崎清明　22
傷ついた青春の思い出……米田咳美　29
牛も育たない大地に立って……佐藤道春　35
飛行場に埋められた農民の怒り……日高　正　41
公職追放され農業に携わる……高木賢治　48
女手一つで重労働に耐える……中島百枝　54
開拓者の悲哀……池田正男　63
経済苦のため退院できなかった娘……四本キクヨ　69
逮捕されたヤミブローカー……清藤藤良　75

〝B29墜落〟……甲斐秀國 83
入植第一号……村岡末隆 91
薩摩女の意地でつらぬいた開拓……図師チヨマツ 97
戦争の後遺症は今もなお……窪田秋義 104
死線を越えて開拓へ……山川　勲 112
鉄カブトを鍋にして……辻　盛之助 121
やっとできたわが子が死産……内八重ミサ 128
開拓者の子供と差別され……近藤寛治 134
四十歳にして鍬を持つ……中屋マツ 139
故郷に待っていた苦闘の日々……横山タミエ 145
開拓組合長の妻として……稲井ミヤ子 151
米一粒のほんとうの味……佐藤イトノ 158
父の戦死を乗り越えて……黒木鶴雄 163
二度の開拓を経験して……田口芳加 169
開拓半ばで弟が餓死……藤本武夫 177
開拓に捧げた娘時代……木原ツルエ 184
命綱となった〝カライモ〟……加藤末雄 192
労働者となって食いつなぐ……奈須野重夫 198

大地に刻まれた敗戦のみじめさ……山中春雄 206
一保健婦として入植地へ……寺崎ヨシ子 213
開拓行政に携って……斉藤国雄 220
あとがき 223

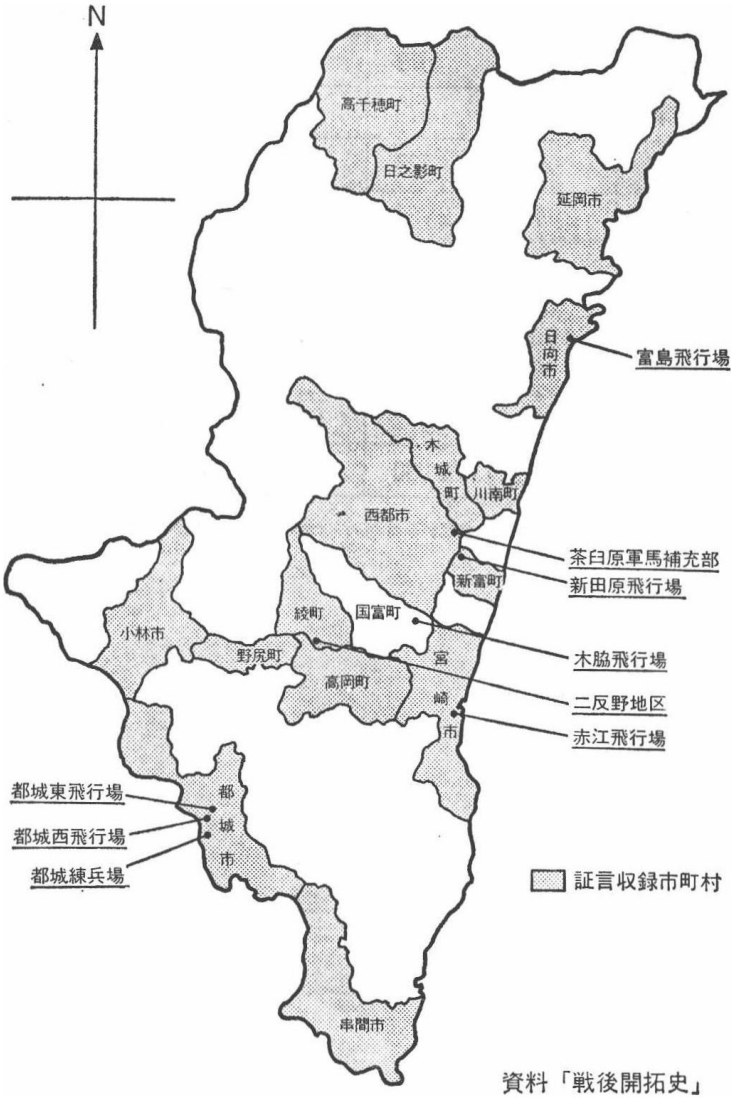
九州内への年度別入植実績戸数(S.20～24)

県名＼年度	S.20	21	22	23	24
福岡県	559	579	445	182	162
長崎県	580	678	412	130	102
佐賀県	74	728	471	120	122
宮崎県	2,116	2,786	1,803	405	260
熊本県	314	1,108	800	382	345
大分県	245	948	882	160	242
鹿児島県	1,360	2,645	853	299	333
九州	5,248	9,472	5,666	1,678	1,566
全国	28,352	52,080	37,467	18,606	12,777

(単位:戸)

(資料:農林省「入植統計都道(支庁)府県別・年度別入植実績戸数」)

緊急開拓集団地開墾事業地区（昭和20年度）



資料「戦後開拓史」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

資料（年表・グラフ・地図）

緊急開拓事業実施要領（昭和二十年十一月九日、閣議決定）

「終戦後ノ食糧事情及復員ニ伴フ新農村建設ノ要請ニ即応シ大規模ナル開墾、干拓及土地改良事業ヲ実施シ以テ食糧ノ自給化ヲ図ルト共ニ離職セル工員、軍人其ノ他ノ者ノ帰農ヲ促進セントス。」

大地に爪する想い

——戦中戦後の開拓の記録

働き手を取られた悲しみ

山田　マスヲ（主婦　70歳）

昭和十九年一月当時、私には、長女（昭和七年生）、次女（同九年生）、長男（同十一年生）、双児の次男、三女（同十五年生）、三男（同十七年生）の三男三女の子供六人がいた。その上、私は身重でした。しかしながら私は開墾の農作業と子供の育児とを女手一つでしなければなりませんでした。主人は昭和十二年、昭和十四年、昭和十八年と三度の召集で戦地へまいりました。

そのなかで昭和十四年、主人が出征する前に、児湯郡新富村の三財原の荒野原の真っただ中にある村有林を一町歩余り購入。そこはほとんど人が寄りつかない小高い山でした。そこで開拓同然の開墾生活が始まったのです。村有林とはいえ整備、整地されている訳ではなく松の木を植林し伐採した後で、大きな根っ子や雑木のおい茂った原野でした。十六年に復員した主人とともに、だれにもわずらわされない我が家を建てたいと思い準備に取りかかったのです。一町歩の小高い山の東の裾野を切り開き、平地にしようと造成を始めましたが、直径一メートルもある根っ子は二人で一日かかっても取り除くことはできませんでした。二日も三日もかかる作業が続きました。やっと五畝ばかりを開墾した平地に大工の経験のある主人が家を建て始めました。これでようや

く家に住めると喜びいさんでいましたが、主人に三度目の召集令状。そのため主人は、やむなく戦地へ赴きました。

一家の柱をとられた我が家は、ただ、雨、露がしのげれば良い程度のものでした。ただ元気で過せれば良いと思ったものの、残された六人の子供の育児や膨大な原野の開拓が、身体の小さい私の肩にすべてのしかかってきたのでした。子供を宿したからといっても、食べるためには毎日の農作業の手を抜く訳にはいかないのです。つわりの苦しいときも朝から晩まで汗水流して働き続けました。そんな姿を見ていた母は、私の身体を心配し、

「あまりきつい仕事をすると流産するよ」と注意するほどでした。しかし、私は内心〝戦争に主人はとられ、子供が産まれれば食べることに今までよりよけいに苦労する。作物を作らなければより以上につらい思いをしなければならない、いっそこのまま流産すれば良い〟と思ったこともあり、今思えば恐ろしいことです。戦争によって母親としての本来あるべき姿も見失いかけ、本当に悲しい考えを持ったものでした。

そうしたなかで昭和十九年三月に四男を出産しました。三男、三女のときもそうでしたが今度の出産のときも産婆さんが間に合わなかったのです。助産婦の数も少なかったのです。私一人で子供を産みおとし、お産のあとを自分で始末しました。一方、血のりのついた赤ちゃんはそのままにして産婆さんが来るのを今か今かと待ったものでした。

出産後、十日間は実家より母にきてもらって炊事、洗濯、畑作りの面倒を見てもらいました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com